

今治明德高等学校

平成二十年度

学力検査

国語問題

— 矢田分校入試 —

\* 解答は、すべて別紙解答用紙の該当欄に記入しなさい。

受検番号

--

□ 次 of 文章を讀んで、後の問いに答へなさい。ただし、設問の都合上省略した部分があります。

上品と下品の區別は何だろう。辞書には「上品・品質のすぐれているさま、品性。品格がよいさま」、「下品・品性、品格が卑しいこと。卑しい行動や態度をとるさま」とあるが、私はそうは考えていない。私個人が考える上品と下品の境界線は、その場所に流れる空気を察知し、そこで期待される行動をとれることが上品、その空気に鈍感<sup>a</sup>であることが下品、というものである。その人間が育つた文化背景や、A 的地位、教育、職業といった要素を一切廃し、その一線だけを境界にしてみると、上品と下品の違いはいくぶん見えやすくなる。( I )

極端な例を挙げれば、たとえば私がかなりくたびれた格好で銭湯へ行つても、それを下品だと非難する人はいないが、その格好で高級料亭に行けば下品だ。また逆に高級料亭に行くような格好をして銭湯へ行つたら、それもまた下品な行為だ。( II )

つまり、B 的な上品や下品など存在しない。一人の人間が空間を移動することによつて、同じ行動をとつても下品になったり上品になったりする。その空間で自分に期待されているのはどんな行動なのか、その空気を感<sup>a</sup>じ取る能力が勳である。

日本人が下品になった、と感<sup>a</sup>じられるのはその空間の空気を感<sup>a</sup>じとる能力がなくなった、つまり鈍感になったことが原因だと私は考へている。( III )

よくこんな話がある。とあるパリの高級ブティック。フランスでは、長い歳月をかけて成熟を手に入れたご婦人がたが、自分にはそれを身に着けるだけの品格が備わつたという自信をもつて初めて手にする高価な衣服やバッグを、それを入手するだけの金を持つている若い日本人が買<sup>あ</sup>ひ漁<sup>あ</sup>つていく。( IV )

「品格とは、お金で買えなくってよ」フランスのご婦人が日本人を軽蔑する。ここには重要な図式が隠されている。欲しいものが高いつころからぶらさがっている。人間は二つの方法を考える。その物のあるところまで階段を一つずつ上がっていくという方法と、なんとかそれを早く手に入れようと、自分のいる所まで引きずり下ろすという方法。前者の方法を可能にするのは、X。後者の方法を可能にするのは、Y。下品とは、どれだけのプロセスを省いて物を手に入れるか、つまり、時間を金で買うということなのだろう。

私たちはこの数十年、日夜努力をして働き続け、豊かな暮らしを目指して上を向いて歩いてきた。はしよれるプロセスはすべて金でセイサン<sup>c</sup>してきた。高いところにある物の一つ手に入れるたびに豊かになったような錯覚を起こしながら、実は上にある物を引きずりおろす努力しかしてこなかった。私たちはこうしてZ。下品を目指してきたわけだが、果たして下品から脱却できる日はくるのだろうか、という問いを次に考えてみたい。

日本人の下品化を決定的に促進させたのは高度成長期だろうが、私は子どもだったため、次に下品幅を広げたバブルを題材にしよう。私はバブルの頃に人格形成期を送ってしまった、空っぽの世代の一人だが、幼いなりにも、このような好景気は狂っている、と思っていた。何の技術も職能もないただのアルバイトに大金が入り、日本円はぶちぎりの強さで世界のどこへ行っても何もかもが安く思え、どんな大学生でも就職できる。……こんなことは間違っていると感じていた。この狂った価値観を軌道修正するためには、景気が悪くなるしかない私は思っていた。この思いが届いたのか日本は一転、不景気になった。

少なくとも「急激な金」の「金」が消えた。これで我々も少しはまともな人間に戻れるに違いない。足下を見つめ直せるに違いない。下品から脱却するチャンスがあるに違いない。期待は大きかった。しかし、私たちが選んだのは、一〇〇円ショップと量販店の道だった。<sup>②</sup>振り子はこっちに振れてしまった。

「急激な金」の「金」を失っても、我々にはまだ「急激」、つまり引きずり下ろす習慣だけは残っていた。設定額をうんと落とすし、やっぱ引きずりおろす。ブランド物のバッグを引きずり下ろすくらいならまだ愛嬌あいきょうがあつたが、一〇〇円のプラスチック製品や一〇〇〇円のフリースを引きずり下ろす光景は、笑うことすらできない。

私たちはもはや、一〇〇円の商品に見合う品格さえ持っていないのかもしれない。もう下品ですらないのかもしれない。<sup>③</sup>

(星野博美『純粋な我々』による)

(注1) フリース：軽くて暖かい高密度織物。アウトドアウェアとして利用されている。

問一 線部 a 「鈍感」の対義語を、漢字で答えなさい。

問二 A B に入れるのに最も適切な語句を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 絶対 イ 相対 ウ 社会 エ 文化 オ 主観

問三 線部 b 「はしよれる」の言葉の意味を、本文中の語句を用いて答えなさい。

問四 X Y に入る最も適切な語句を、本文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。

問五 線部①「階段を一つずつ上がっていく」とはどういうことですか。本文中の語句を用いて二十字以内で説明しな

なさい。

問六 線部 c 「セイサン」にはどの漢字を当てはめたらいいですか。最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 生産 イ 精算 ウ 清算 エ 成算 オ 製産

問七 本文には、次の一文が抜けています。どこに入れたらいいですか。本文中の I～IV の記号で答えなさい。

日本人は下品になったというより鈍感になったのだと思う。

問八 Z に入る慣用句を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 爪をといで      イ 爪に火をともして      ウ 身を焦がす      エ 身につまされる      オ 身を粉にして

問九 線部②「振り子はこつちに振れてしまった」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア

～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 欲しい物は何でも手に入る状況から、欲しい物は手に入れることができず、安い品物でがまんしなければならない状況に転じてしまった。

イ 粗悪な品物を高い値段で買わなければならない状況から、良質な品物を安く手に入れることができるような状況に変わってしまった。

ウ 時間をかけて成熟していろいろな物を獲得していく道に向かうのではなく、欲しい物を安く手に入れる安易な方向に進むようになってしまった。

エ 物質的欲望の空しさを自覚する方向に進むのではなく、値段の安い品物を大量に買い込もうと、より打算的にふるまうようになった。

オ 高価な品を懸命に努力して手に入れる方向ではなく、高価な品を欲しいという願望を抑制して慎ましく堅実に生きる方向に転じてしまった。

問十 線部③「もう下品ですらないのかもしれない」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の

ア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不景気な状況が長く続いた結果、金銭的に窮乏し、時間を金で買うことができず、満足な暮らしが営めなくなっているかもしれないということ。

イ あまりに安い商品に取り囲まれて生活するうちに自然に品性が磨かれ、上品な精神を獲得することができたのかもしれないということ。

ウ その場所に流れる空気を察知し、その場所でどう行動すればいいかを考えたりする能力を今は失ってしまったのかもしれないということ。

エ 時間を金で買うのではなく、逆に時間をかけて品物を購入するようになり、上品と下品の区別が無意味になるように成熟したのかもしれないということ。

オ 私たち日本人は、もはや上品と下品の区分が無意味になるような気高い人間性を手にいれてしまったのかもしれないということ。

問十一 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高度成長期の日本人は地道に働く人が多く、上品であったが、バブル期の日本人は一気に下品になっていった。

イ 上品か下品かはその場の状況によって変わるが、高価な品物を金の力で手に入れようとするのは下品なことである。

ウ バブル期以後の不景気な日本では、安い品物を買って求めるようになり、バブル期のような日本人の下品化は解消された。

エ 「品格とは、お金で買えなくなつてよ」という言葉を日本人は真剣に受け止め、高価な品物に手をださないようにすべ  
きだ。

オ バブル期のように日本の景気がよくなると日本人は下品になるので、日本はもっと不景気になったほうがよい。

二 次の①～⑤の各文の——線部の部分の読み方を平仮名で答えなさい。

- ① 職人を雇う。
- ② 身体を鍛える。
- ③ 鳥が空を旋回する。
- ④ 祝いに漆器を贈る。
- ⑤ ビタミンを摂取する。

三 次の①～⑤の各文の——線部の部分を漢字で答えなさい。ただし、必要なものには送り仮名をつけること。

- ① 子どもに夢をタクス。
- ② 版画をホル。
- ③ 注意力がサンマンになる。
- ④ 文字をテイセイする。
- ⑤ 裁判をポウチヨウする。

四 次の文章は、重松清『きよしこ』の一節である。中学三年生の少年（シラちゃん）は野球部に所属している。八月に三年生にとっては最後の大会が行われるのだが、転校してきたばかりの大野がマサに替わってサードのレギュラーに選ばれたために、部内には気まずい空気が流れていた。本文はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

土曜日の午後、部室<sup>①</sup>の雰囲気は最悪だった。

ユニフォームに着替えながら、「あーあ」と三好が大げさなため息をつく。「マサもかわいそうじゃのう、せつかく一年生の頃からがんばったのにのう」

「ほんま、ほんま」と芝居がかった相槌<sup>あひづり</sup>を打つのは、篠原。二人ともマサとは小学校のスポーツ少年団時代からの付き合いだ。

「わし、転校しようかのう……」

マサがおどけて、泣き真似<sup>まね</sup>をした。三好と篠原は目配せしながら声をあげて笑い、他の連中も、言葉には出さなくても気持ち<sup>②</sup>は同じなのだろう、大野には誰も話しかけない。大野もみんなに背中を向けて、ロッカーに張りつくような窮屈な姿勢で服を着替えていた。

練習試合は夕方から。その前にウォーミングアップを兼ねて、ふだんどおりの練習をすることになっていた。

大野のアンダーシャツは、いつものように白の袖だった。少年はそれを目の端で確かめ、ため息を喉<sup>のど</sup>の奥でつぶした。

ユニフォームを着替えたあとみだらだとおしゃべりするマサたちをよそに、大野は一人で部室を出た。

少年があわてて追いかけてよそすると、三好が「シラちゃん、よそ者の味方するんか？」と不服<sup>ふふく</sup>そうに訊<sup>き</sup>いた。

「……同じ野球部じゃろうが」

「違うわい」篠原がぴしゃりと言う。「途中から割り込んできただけじゃ、あんなん」

三好は（A）つづけた。

「わし、試合に負けてもええけん、昔から一緒に練習した者だけでやりたいよ。どげん野球が上手<sup>うま</sup>うても、よそ者はよそ者じゃけ

三好も篠原も、「のう？シラもそげん思うじゃろう？」と——かつて、よそ者だった少年に訊く。

少年は二人をにらみつけ、同じまなざしをマサにも向けて、（B）言った。

「上手い者からレギュラーになるんが、あたりまえじゃ」

そのまま、大野を追って外に出た。

大野は三塁ベースの横で、柔軟体操をしていた。前の学校で練習前にやっていたという体操だ。

少年に気づくと、大野は「まいっちゃったな……」と寂しそうに笑った。「なんか、俺、みんなを敵にまわしちゃったんだな」

そんなことない——とは言わなかった。

代わりに、「アンダーシャツ、俺のやるけん」と言った。「大野、黒いやつ持っとらんじゃろ」

「試合用のはあるよ。昨日、おふくろに買ってきてもらった」

「何枚？」

「一枚だけ。練習用のは、ほら、もうあと一カ月とか二カ月ぐらいしかないから、もったいないじゃない、って言われて……」

神奈川県の中从から転校してきた大野は、テレビの『中学生日記』の登場人物みたいにしやべる。マサたちは、

（C）それも気に入らないのだろう。

④「俺の、やる」少年は言った。「余つとるけん、俺のを一枚やるわ」

「いいよ、そんなの。練習だし、悪いから」

「ええけん、ほんまに余つとるし……いま、持ってきとるんよ。試合の前は、みんな同じ色のシャツにしようや。そのほうが、な

んちゆうか、盛り上がるけん」

五月に買ってもらったばかりのシャツだった。六月の大会でそれを着たら、二試合で八打数七安打の大当たりだった。縁起のいい——ほんとうは八月の最後の大会でも着ようと思っていたシャツだ。

大野はまだ少し戸惑っていたが、少年が「のう？」と念を押すと、小さくうなずいた。

「練習試合で勝ったら、家に戻る前にアイス一緒に食おうや」

大野はまた寂しそうに笑って、「ヒットの多かったほうがおごってもらう、ってことにしようか」と言った。

少年と大野は、学校から帰る方角が一緒だった。ほんとうは少年の家まではもっと近い道があったが、転校して間もない大野が一人で帰っているのを正門で見かけて、

「なんじゃ、大野とわし、おんなじ道じゃったんか」と帰り道を変えたのだった。

大野と特に気が合う、というわけではない。

ただ、大野が転校生だから——かつての自分と同じ、よそ者だから、絶対に仲良くしてやろう、と思っていた。困ったことがあったら絶対に助けてやろう、と決めていた。

俺って、こんなにおせっかいな性格だったっけ？

ときどき、自分でも不思議になる。

問一 (A) (C) に当てはまる語句を、次のア～カの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たぶん イ すでに ウ かなり エ さらに オ きつぱりと カ しみじみと

問二 線部 a「する」・ b「着」の動詞の活用の種類を、それぞれ答えなさい。

問三……………線部Ⅰ「不服そうに」・Ⅱ「念を押す」の意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えな  
よ。

Ⅰ「不服そうに」

- ア 寂しそうな様子で
- イ 残念そうな様子で
- ウ 怒りに満ちた様子で
- エ 納得がいかない様子で
- オ あきらめきれない様子で

Ⅱ「念を押す」

- ア 穏やかに尋ねる
- イ しつかり確かめる
- ウ 強引に返事をさせる
- エ 相手の様子をうかがう
- オ 自分の考えを押し付ける

問四——線部①「部室」と熟語の構成が同じものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 腹痛
- イ 増減
- ウ 退場
- エ 衣服
- オ 足跡

問五——線部②「他の連中も、言葉には出さなくても気持ちと同じ」の説明として最も適切なものを、次のア～オの中か  
ら一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他の部員たちも、心の中では転校生の大野がレギュラーに選ばれたことに納得していないということ。
- イ 他の部員たちも、本心では現在の野球部の雰囲気にも不満を感じていて、転校を考えているということ。
- ウ 他の部員たちも、マサたちのグループから嫌がらせを受けたくないと、内心おびえているということ。
- エ 他の部員たちも、本当は大野に同情的で、マサたちの陰湿な態度を決して許してはいないということ。
- オ 他の部員たちも、三好や少年に対して怒りを感じているのだが、二人が怖いので我慢しているということ。

問六——線部③「かつて、よそ者だった少年」が表している内容について説明した次の文の（ ）に当てはまる言葉を

本文中から六字で抜き出しなさい。

少年も以前、この学校に（ ）ということ。

問七 —— 線部④「俺の、やる」に込められた少年の心情として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人だけ白いシャツを着ていることが、大野が孤立している原因だということ気付かせようとしている。

イ 家計が厳しくせいたくができない大野に同情し、それを理解しない他の部員たちに強い怒りを感じている。

ウ 同じ色のシャツを大野が着ることで、少しは他の部員たちと気持ちが通じ合うのではないかと感じている。

エ 縁起のいいシャツを着ることによって大野が活躍すれば、マサたちも大野を認めるはずだと確信している。

オ チームが分裂してしまった今となつては、せめてシャツの色だけでもそろえなければいけないと焦っている。

問八 本文における少年の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 以前自分を苦しめたマサたちに仕返しをするために、まずは大野を味方にしてチーム内の立場をよくしようと画策している。

イ 実力以外の部分でレギュラーを決めようとする野球部の方針に反発し、大野を受け入れることで強くなることを願っている。

ウ 転校生であるがゆえにチームにとけこめない大野に同情し、他の部員たち全てを敵に回してまで大野を認めさせようとしている。

エ かつての自分と同じ立場である大野に共感し、少しでも大野が他の部員たちと打ち解けることができるように配慮して

いる。

オ たとえ誰であつても、困った人がいると見過ごすことができない性格がマサたちとの仲を気まずいものに行っていることに悩んでいる。

## 五 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

ある侍、「病氣につき、湯治つかまつりたく候」と、殿へ申し上げければ、「いかにも暇を取らするほどに、何事も心まかせに、ゆるゆると仕れ」とあれば、御意かたじけなしと喜びて、有間に湯治しけり。「心持ちはよけれども、ぬれたる髪しずくの雫、身にかかりて、氣(注3)の毒ぢや」といへば、連れいふやう、「何事も心まかせにせよとの御意ある上は、それほど苦にならば、また生はゆるものぢやほどに剃そられよ」といへば、「もつともなり」とて、そのまま坊主ぼうずになり、「これで一段心も軽し」と喜びけり。やうやう日数重なれば国へ帰る。親類一門これを見て、「こ(注3)は、いかなることぞ」といへば、ありし次第しだいを語る。「いかに、殿の心まかせと御意ありとても、これは格別なることぢや。とかく申し上げいでは、かなふまじき」とて申し上げたれば、手を打ちて仰天(注4)なされた。さて、御前へふるひふるひ出たり。「その方は坊主になりて、俗名ではすまぬものぢや」とて、御咄(注5)の者を召して、「あれに名を付けてとらせよ」と仰せければ、そのまま安(注4)枕と付けたり。殿、聞こし召して、「これはめずらしき名ぢや。何たる子細(注7)ぞ」と仰せければ、「総じて値段安(注8)き御器は、湯に入れますればそのまま反ります。この男も湯に入ると剃りましたゆゑに、安枕でござりまする」といふた。

(注1) 湯治…温泉に入つて病氣の治療をすること。

(注2) 有間…現在の兵庫県にある有馬温泉。

(注3) 氣の毒…困る。

(注4) かなふまじき…許されないだろう。

(注5) 俗名…仏門に入る前の俗世間での名前。

(注6) 御咄の者…主君の相談役である近臣。

(注7) 子細…事情。

(注8) 御器…食器。

問一 〰〰〰〰〰  
線部ア～オの中から主語が「ある侍」であるものを二つ選び、記号で答えなさい。

問二 〰〰〰〰〰  
線部①「何事も心まかせにせよ」の現代語訳として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 全てのことに関して自分で責任を取りなさい。

イ どのような時であっても好きなようにしよう。

ウ どのような場合においても私の考えに従いなさい。

エ どのようなことでもあなたの思うようにしなさい。

オ 全てにおいてあなたの思うようにしてはいけない。

問三 ——— 線部②「やうやう」を現代仮名遣いに改め、その意味として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 急に    イ 特別に    ウ 次第に    エ 普通に    オ 明らかに

問四 ——— 線部③「こ」は「これ」という意味の指示語ですが、指している内容について説明した次の文の（Ⅰ）・（Ⅱ）に当てはまる語句を本文中から抜き出しなさい。ただし、（Ⅰ）は三字、（Ⅱ）は二字とする。

（Ⅰ）が（Ⅱ）になったこと。

問五 ——— 線部④「安枕と付けたり」とありますが、そのような名前を付けた理由を説明した次の文の（Ⅰ）・（Ⅱ）に当てはまる語句を答えなさい。ただし、（Ⅰ）は二字、（Ⅱ）は一字とする。

値段の安い食器をお湯に入れると（Ⅰ）のと同じように、ある時も温泉に入って（Ⅱ）を剃ったから。